

樗流俳句選抄（冬季雑詠）

選者 今津大天 先生

佳作

しもやけの孫の手擦る声やさし 波多野妙生
 湯たんぽを抱えて起きる朝まだ 谷藤尚花
 川の水めじきり減りて寒に入る 波多野寿扇
 廃校の庭広々と雪野原 畑佐美泉
 竹馬の跡点々と広き庭 林 巴城
 赤い目の爺が得意の雪兎 畑佐楽人
 息白し頬赤らめて登校児 早津郁男
 清流に楮並べる寒晒し 額 額久峰
 ゆいたりと柚子湯につかる仕舞 丹羽三七九
 鐘の音や平和を祈る去年今年 国枝紫陽
 日向ぼこ編む手休めてついこく 服部利水
 眼鏡辞書九冬の文机 二村秀香
 時刻表見入るバス停冬帽子 野田春香
 道祖神落葉纏うてうずくまる 天野桂花
 年惜しむ満足気になる夫の顔 兼氏翠月
 天守閣伊吹嵐に身が縮む 後藤松月

〈地位〉

雪婆知己のごとくに手に受けぬ 岩間芳泉
 〈評〉初冬になると雪婆（ばんば）、雪虫が、
 わ低空を飛んでいる。それを捕まえるのはな、
 難しいと思うが、作者はそいと両の掌を広げ、
 が掌に止るように仕向けたのであろうか。雪婆
 さないように、「知己」を迎えるようにやさし
 け止めたのだろう。また、「知己のごとく」、
 のには、子どもの時にそのようにして遊んだ、
 意味も込められているかも知れない。或いは
 魂だと思ったのか。「知己のごとく」にはい
 な意味が込められているように思う。

〈天位〉

皆離れ昭和の家の隙間風 杉山多美
 〈評〉昭和の時代には子供たちもまだ小さく
 だいたが、その子供たちも皆都会へ行してし
 ・今は夫婦二人だけになりてしました。今年
 な家で冬を迎えるのかと思うと寂しい。その
 和の時代に建てたもので、この頃は隙間風が
 きて寒い。まさに「昭和も遠くなりけり」
 ・我が家も築百年を超えて、まさに隙間風の

七客

帰り花白寿の母の頬に紅 大久保大凹
 冬帽子冠れば耳が遠くなる 村瀬昇竜
 大根をスポと抜いて仰ぐ空 舟坂如月
 過疎の村結いの力で雪囲い 岩田華泉
 餅搗きに内外孫が揃いけり 岩田紀正
 雲水の赤き素足の今朝の霜 井戸幸女
 豆腐屋の喇叭遠のく雪催 永縄一紅

三光

〈人位〉

懐かしや杵搗く餅の音聞え 寺田登仙
 〈評〉この頃はお餅はスーパで買うか、家
 搗くとしても電動回転式の餅搗き器であろう、
 昔はわが家でも朝早くから起きて、家族総出
 で搗いたものである。作者は餅搗きの経験が
 のである。路地を歩いていて餅搗きの音が
 えて思わず、蒸した餅米から上がる湯気と匂
 搗く時のかけ声と杵の音など、一瞬に甦りて
 のだろう。まさに「懐かしや」である。

くるような「大正」の家である。それでも生
 育つた家は親しく心安まる。子供たちが離れ
 隙間風があっても「昭和の家」にはぬくもり
 のだろうと思う。

選者詠

三成殿が無念の陣地冬紅葉

大天

樗流俳句次号応募要領

- 一、春季雑詠（ひとり三句）
- 一、締切り令和三年一月末日厳守
- 一、用紙 郵便ハガキ（句料無料）
- 一、所属社名、雅号名記
- 一、樗流会員変名不可
- 一、投句所 〒504、0934
- 一、各務原大野町一丁目一二〇番地
- 一、岩田華泉宛
- 一、電〇五八、三八二、七七二五

樗流俳句選抄本（春季雑詠）

梅村 五月

佳作

しみじみと孫の入試で知る速さ 高橋照笑
 静けさやみなうたた寝の置炬燵 御田村光女
 伊那街道車窓にバミと桃の花 畑佐楽人
 愛くるし孫と雛壇祝い酒 二村秀香
 蓮華田を車で廻りて木曾の旅 河村花玉
 酒仕込み終へ古里へ杜氏帰る 服部利水
 露味噌の香り仄かに里の味 井戸幸女
 懐かしや肩車寄せ会ひた桜道 山内澄香
 久し振り地下足袋履いて畑を打 柴田小舟
 地桜の開花を告げる紙面満つ 後藤松月
 散歩道はや蒲公英を見つけたり 長尾伎与子
 参道の花を楽しみ宴の輪 国枝紫陽
 ひとせの辿るは早し初つばめ 永縄一紅
 爛漫の春は津軽の海を越す 青木凡舟
 春光や老いに喜び運びくる 波多野妙生
 お花見の家族が群れる長良川 寺田登仙
 髪切りて春風まとふバスの旅 兼氏佐代子

〈地位〉

パンジーにスマホを向ける古い 岩田華泉
 〈評〉 本年は温かいのでパンジーがいじせい
 に咲き揃った。
 老人の皆さんもスマホを駆使されるよう
 なった。
 歓声を挙げているのは、「老いの群れ」と
 断定された点が景となりつつたわじてくる。
 〈天位〉
 わらび狩り携帯電話で話をり 林 巴城
 〈評〉 便利な世の中になった。
 わらび狩りに携帯電話を使い教え合
 っているのだ。
 「おーい、そちは沢山採れるか」「あ
 な、白い岩があるあたりにいっぱい生
 えているのでこちらへ来いよ」と位置
 を知らせ合っているのだ。
 わらび狩りをするのに携帯電話を使
 した例をはじめ知じた。
 山盛りになりたわらびの束を見せ合
 っている光景が浮かんでくる。

振りあげし筍産毛の光けり 岩間芳子
 山裾に田園風景雉の声 畑佐俊作
 散歩道イヌフグリ咲き杖遊ぶ 柴田文花

七客

花吹雪格子戸すかし紙帳場 額久峰
 春うらら東坡の句碑の細き文字 加藤晴月
 合羽着て受粉作業の梨畑 村瀬昇竜
 人口の雪のゲレンデ客疎ら 畑佐美泉
 錆鎌を研ぐ小流れの温みけり 吉田亀笑
 墨太きうぐひす餅と菓子処 早津郁夫
 ちぐはぐな難聴会話山笑ふ 波多野寿扇

三光

〈地位〉
 席変えてホームの夕餉二月尽 藤井 修

〈評〉 追記に依れば一昨年妻を亡くされ
 娘さんの住んでおられる瀬戸市のホーム
 に入所されていると、ホームでの席替え
 があじて楽しい夕餉が訪れたのだ。
 席を替えたことと時の過ぎてゆく早さ
 がつたわじてくる。

選者詠

兄よりも弟が勢ふ追儼かな 五月

注意事項

樗流俳句も良吟がつぎつぎと投句されて
 来て欲びにたえない。
 投句の中には「あ、この句どこかで拝見
 したぞ」とか「類句に近いな」と言いた句
 がありました。
 生活の中に生まれたあくまでも自作の句
 を投句して下さい。

樗流俳句次号応募要領

一、夏季雑詠（ひとり三句）

一、〆切

一、用紙 郵便ハガキ（句料無料）

一、所属社名、雅号名記

（樗流会員変名不可）

一、投句所 〒504-0934

各務原市大野町1-120

岩田数美

電（058）242-2254番